

## 公刊にあたって

皆様のご協力のおかげで「図説 わが国の慢性透析療法の現況（2003年12月31日現在）」（以下「現況」）をここに発行する運びとなりました。

「現況」（1978年まで「現状」）は、人工透析研究会の事務局を率いていらした千葉大学の小高通夫先生が、事務局の業務として行われたアンケート調査に始まります。1986年に人工透析研究会内に統計調査委員会が発足し、初代委員長に小高先生が就任されました。1989年、京都大学澤西謙次先生が第二代、1990年より前田憲志名古屋大学教授が第三代委員長に就任され、他疾患には類をみない詳細な統計成果が、会員に報告されるようになりました。

2000年6月の透析医学会総会から私が第四代統計調査委員長を引き継がせていただきました。初年度は、事務局を名古屋大学大幸医療センターから東京本郷の透析医学会事務所内へ移動いたしました。第二年度には、コンピュータシステムのダウンサイジング、すなわちDOS/Vマイコンに汎用データベースソフト「オラクル」に変更しました。また、このコンピュータの見直しにより、2002年11月には「現況」をCD-ROMにより配布できるようになりました。2003年からは総会時に頻用される統計データをできるだけ図表化した「図説 わが国の慢性透析の現況」を配布後、最終的なデータ確認後には従来の詳細なデータをCD-ROMでお送りしました。また、CD-ROMが容易にコピーされやすいことから「現況」の利用規程をつくらせていただきました。その結果、医学会ウェブにおける統計調査結果の公開も可能となりました。2004年度には、死因コードの国際標準への移行、データベースの検証作業によりより確実な統計データベースの構築を行い、他領域との情報交換などを可能にするデータベースとするよう努力を行っています。本統計データは、医学会の会員みなさまのご負担により、日本の透析医療を良くするために、収集した医療データです。本学会の目的に適合したご利用をお願いいたします。

次に2003年末現在の慢性透析患者調査の経過について報告します。まず、本邦の慢性透析療法実施施設名簿を、本学会施設会員名簿をもとに、Key manの先生方のご協力により非会員施設、新規開設施設などを加えて、2003年10月末日に作成いたしました。2003年度の統計調査対象施設台帳の施設数は3,750施設と2002年末対象施設数3,625施設と比べて125施設（3.44%増）となりました。同対象名簿をもとに11月末にアンケート用紙ないしはフロッピーディスクを送付し、回答をお願いしました。

2004年1月末日の締め切りの時点で回収施設1,253施設（33.41%）と回収率が低かったため、未回収施設に対して統計調査ご協力をお願いの葉書を送付しました。2月末で未回収の施設には再度のお願いのFAXを送信しました。3月に入り、統計調査委員、同小委員、各県Key man、統計調査委員会事務局から電話によるお願いを複数回実施しました。調査用紙の回収は最終的には5月14日で締め切りました。

アンケート回収施設は3,717施設（前年度3,612施設）回収率99.12%と昨年よりも0.48%減（前年回収率99.60%）と、ほぼ同程度の回収率が得られました。慢性透析患者の現況を示す統計資料としての質を担保するものとして十分な回収率を維持することができましたことは会員各位のご協力の成果と考えます。一方シート2、3、4未回収は87施設（前年111施設）とほぼ同等で、全シート回収は96.80%（前年96.57%）と、詳細な分析を行う上での信頼性はさらに改善されつつあると考えます。

シート1から集計した2003年末の慢性透析患者数は237,710人であり、昨年に比べて8,172人（3.6%）の増加となりました。高齢化の進行、糖尿病の増加の中で粗死亡率は9.3%とほぼ同水準を維持できました。

以上、高い回収率を得て「図説 わが国の慢性透析療法の現況（2003年12月31日現在）」を公刊できるに至りましたのは、偏に会員をはじめ調査にご協力を頂きました皆様の、本統計調査に対するご認識の深さとご協力の賜物であります。厚く御礼申し上げると同時に、統計調査委員会として臨床に役立つ情報をできる限りご提供できますよう、さらに努力いたします。最後に、統計調査記載にご協力頂いた皆様、ならびに全国のKey manのご努力に深く御礼申し上げます。

社団法人 日本透析医学会 統計調査委員会

委員長 秋 葉 隆